

「狭くて高いゴールは集団技能発展の邪魔？」

土 田 了 輔* 榊 原 潔*

(平成9年4月30日受理)

要 旨

本稿は、バスケットボールのゲームにおける集団技能発展とルールとの関係について論じた。教材研究では、ボール・ゲームのルール変更について多面的な研究が見られる。しかし施設についてのルール規定と集団技能発展との関係について論じた研究は少ない。

バスケットボールの発展史を省みると、集団技能発展は主にディフェンス・システムを構築することからはじまっている。この傾向はワン・ハンド・シュートが考案され、外角からの効果的な攻撃がゲーム様相を変化させる時まで続いた。

そこで熟練者と未熟練者のシュート練習時における成功率の増加を調査した。調査対象者は週4日の練習の中で、100本のシュートを同じ位置から試みていた。この調査の結果、未熟練者ではシュート成功率をおよそ55%にまで引き上げるのに、約2月の期間を要していた。この結果が意味することは、限られた単元内で学習者の外角からのシュート成功率を劇的に向上させることは不可能に近いということである。したがって学習者のシュート成功率が低い体育の授業では、高所取り付けの狭いゴールが集団技能発展を阻害してしまうことがわかった。

KEY WORDS

rule ルール group skill 集団技能
basketball バスケットボール

1. 緒 言

平成元年の文部省中学校指導書保健体育編（以下指導書とする）によると、バスケットボールのゲームはチームの人数、ルールの取り扱い等について工夫し、集団的技能を生かすようにとの指示がなされている。

また、集団的技能の攻撃として「速攻」、「セットオフense（カットイン、ポストプレー）」、防御としては「マンツーマンディフェンス」、「ゾーンディフェンス」が例示されている。したがって、学習者の習熟度を考慮し、集団技能が発揮されやすいように工夫する必要がある、ルール変更もその一つである。

これについて大井は小学生のボール運動について「ルールは作られ改善されねばならないものである」¹⁾と述べている。ただしルール変更の際には、単に簡易化するのではなく、こどもの

実態やゲームの本質等を考慮する必要があることも付記している。また細川²⁾、荒木³⁾、守能⁴⁾もこれと同様の立場からルール変更について述べている。その他に堀江⁵⁾は児童自身の手によるルール作成について報告している。

2. 授業とルール

スポーツは教材として提供される場合、学習者の習熟度や授業の目標等にあわせて様々に手が加えられる。これは勝敗よりも協調・共同を重視する、といった価値観の導入なども考えられる。

しかし球技教材の場合は、ルール等の形式変更も考えられる。これまでにプレーヤーの技能への適合や教材化のためのルール変更について、トラベリングやファールなどの禁止事項の緩和が考慮されていた例が紹介されている。

小沢⁶⁾、三井田⁷⁾の報告によれば1956年当時、我国で採用されていたバスケットボールの女子ルールでは、オーバーガード（相手からボールを奪うことなどや相手を取り囲むこと）が禁止されていた。また、鈴木ら⁸⁾⁹⁾、落合¹⁰⁾、平川¹¹⁾、は基礎的な技能の不足を補うためにトラベリングなどのルールを思い切って緩和したり、ボールを保持したまま歩くことができる“ラグバス”などのゲームも紹介している。ルールは創らないで省略する、といったルール変更の指針について言及する文献¹²⁾もあるが、実際限られた時間の中で集団技能を発揮させながらゲームへステップ・アップさせてゆくにはある程度のルール緩和は必要不可欠であろう。

しかしルールというものは禁止事項のみを列挙するわけではなく、施設や用具などに関する規定も存在する。したがってルール変更といった場合、当然、施設や用具についても吟味する可能性が残されている。

事実我国ではミニ・バスケットボールのルールを作成した当時に、実際にゴールやコート、バックボード等の規格が総合的に検討されていた¹³⁾。また堀江¹⁴⁾はコートやゴールもルールの一つとして子供たちとラグハンド（ラグビー・ハンドボール？）なるゲームを考案しているのである。こういったゲームが創られる背景には既存の学校体育施設の多くが公式競技規則に則って設計・固定されているという現状がある。しかし施設・用具とゲーム様相とは密接な関連があることが報告されている。

そこで次にバスケットボールにおけるリングの規格についての文献を検討し、集団技能との関連を探ることにする。

3. リングの規格に関する先行研究

リングの規格変更に関する研究は以前から行われており¹⁵⁾¹⁶⁾¹⁷⁾、特にリングの高さと大きさについては美濃部¹⁸⁾が中学生男女に対してフリースロー・ゲームをさせた VTR を分析し一応の目安となる数値を推定している。

しかしこの研究では中学3年生男子の妥当基準値が正規の305cmとされている。美濃部の研究動機は『ゲームにおけるシュート率を高め学習活動に意味と興味を持たせる』ということな

のだが、ゲームにおけるシュート率を考察するのなら、ディフェンスとの攻防を伴う状況で実験する必要性があるはずで、フリースローで検討するという分析視点が理解できない。さらにこの結論は中学3年生男子ではリングの規格変更は必要ないということにつながりかねない。

また、1985年には歌代¹⁹⁾がリングの内径を大きくし(直径70センチ)、コート両側にそれぞれ2つずつ設置した“ツーワイドバスケット”を実践している。これによると、リングが大きくなったことに伴うシュート率の向上と、めざすべきゴールが二つあることによる防御の分散・攪乱などに起因し、多くの児童がシュートする喜びを味わうと同時に、攻撃面での集団技能を発現させている。

さらに1986年には高橋²⁰⁾がリングの高さや大きさと集団技能との関連を報告している。この研究は、パスのつながり具合、パス回数、及びシュート数、シュート成功率などを視点とした上で、リングの規格変更が、シュートに結びつく意図的なパスを増加させたことなどを報告している。

以上のような研究は、リングの規格とゲーム様相の関連を示唆している。ただし歌代の実践に関してはゴールが二つあることから、バスケットボールとの比較は難しい。なぜなら、通常のバスケットボールは一つのゴールを守るために防御の連携プレーが発達してきたのに対し、ゴールが二つあるとその連携が多少別の方向に進まざるを得なくなるというのがその理由である。しかしこのことが教材としてのツー・ワイド・バスケットを否定するものではない。

また高橋の報告については、記録用紙にパスやシュートの時のディフェンスの状態が記載されていないので、ディフェンスとのかねあいについては不明である。そういった状態でパスの回数を集団技能としてカウントしている点(もちろん事前に作戦を立てた意図的なパスを対象としているのであるが)は問題が残る。例えば授業中のゲームでは、相手が接近してこない状況において味方同士でパスを繰り返すケースが見られることがある。このような場合、攻撃において同じパスや動きが見られても、相手のポジショニングによっては集団技能とは呼べないのである。

以上のようにいくつかの疑問点が残るが、両者に共通しているのは、ゲーム様相の変化(集団技能の発現)要因をリング条件の緩和による学習者の意識の向け変えに求めている点である。

しかしゲーム様相の変化は単に攻撃側の意識の問題だけで説明できるのだろうか。例えば集団競技というものは攻撃と防御の関係の中で変化をしてきたのではないのだろうか。そこで次に防御側との関連を探るために、ボール・ゲームの技能発達史を振り返って見ることにする。

4. ゲーム様相に影響を及ぼす要因ーサッカーの事例ー

サッカーのルールは1863年に最初に制定され、以来多くの変更を経て今日に至っている²¹⁾。それらルールの変遷は記録に残され、戦術²²⁾、戦略²³⁾も多くの文献^{24)、25)}にまとめられている。ルールや戦術、戦略を総合的に研究したものとして、瀧井の研究²⁶⁾が挙げられる。瀧井によれば、戦術、戦略を発展させた最初のルール変更は、オフサイドルールの改定であると指摘している。オフサイドルールの改定以前は、ボールより前にいる味方プレーヤーはプレーに参加できなかった。現在のラグビーのゲームにおける、スクラム²⁷⁾、モール²⁸⁾、ラック²⁸⁾の際のオフサイドと同様である。従って、そのオフサイドルールのもとで行われたゲームは、現在のラグビーの

ゲームからも想像できるように、ボールを保持しているプレーヤーがドリブルで前進するか、モールやラックのように1つのボールを集団でドリブルする（バック・アップ方式）か、相手陣地へ大きく蹴り入れる、ことによってボールを進めていた。それが、1866年の改定により、3人制オフサイドルールが採用され、ボールより前方にいる味方にパスすることが可能になった。前方へのパスが可能になったものの、正確なパス技能が備わっていない状況の中では、相手ゴール方向へボールを蹴り込み走り込む攻撃（キック・アンド・ラッシュ戦法）がなされたという。従って、ゲームの様相はプレーヤーがフィールド上に縦長に分散したと考えられる。

次の転機は、1880年代のパス技能の向上であると指摘されている²⁶⁾。パス技能の向上につれ、トラップやストップといったボールコントロール技能も向上していったと考えられる。その結果、プレーヤーがフィールド全体に分散し、パスコースを多様にするプレーヤーの配置が工夫されるようになった。WM、4・4・2、3・5・2などの配置された人数で表すシステムがそれである。このような技能の進歩とシステムの考案による攻撃力の向上は、守備の人数の増加とマン・ツー・マン・ディフェンスを生んだ。さらに、マン・ツー・マン・ディフェンスによる守備力の向上は攻撃側にオープンスペースの意識を生み、攻撃の活動性が高まった。体力要素の重要性が高まり、体力トレーニングの必要性が認識されたものと思われる。

このように、サッカーのルール、戦術、戦略、ゲームの様相、技能、体力要素は相互に関連し合いながら系統的に発展してきたし、今後も発展していくものと思われる。

5. 授業とルールサッカーの事例ー

現在のサッカーの競技規則は17条から成る³⁰⁾。しかし、授業のサッカーのゲームにおけるルールの取扱は、技能の習熟の程度などに応じて、チームの人数、ゲームの時間、グラウンドの広さ、ルールの採用など、自由に決めてよいとされている^{31),32)}。ゲームを行うための主なルールとして、ゲームの始め方、得点方法、ラインからボールが出た後の再開方法、反則、反則後の再開方法が競技規則を参考に定められている^{33),34)}。これらはかなりの自由さを持って定められており、サッカーのゲームで最少限必要なルールは、故意にボールを手または腕で扱うこと、つまりハンドリングは反則であるという理解がなされている。現在のサッカー競技規則では、ボールを手や腕で扱うことをゴールキーパーを除いたプレーヤーに禁じているので、この理解は正しいかもしれない。しかし、1863年の競技規則制定当時はボールを手や腕でキャッチすることができたという³⁵⁾。一方、競技規則制定当時から定められていて、しかも、戦術、戦略を発展させた要因であるオフサイドについては、ほとんど関心が払われていない。これも、小人数のサッカーから発展したフットサル（FUTSAL）では、オフサイドの反則は採用していないので、授業のサッカーが先取りしたと言えるかもしれない。

授業で行われてきた「サッカー」のゲームは、サッカーよりも、むしろフットサルにより類似していて、サッカー的ゲームである、と言えるのではないだろうか。このことは、フットサルがいつでも、どこでも、だれでも「サッカー」が楽しめるように、ということから生み出されたためであると考えられる。

6. ゲーム様相に影響を及ぼす要因ーバスケットボールの事例ー

バスケットボールの場合もサッカー同様、その技能発達史がかなり正確に記録されている。その様子は我国においては吉井らにより詳しく紹介されている³⁶⁾³⁷⁾³⁸⁾。

それによると、バスケットボールの集団技能は当初ディフェンス偏向の時期があった。³⁷⁾1891年バスケットボールが考案された時、ディフェンスは対人防御主流であった。しかしガードは実質ゴールの番人役であり、攻撃に参加することはほとんどなかった。

やがて1917年から1928年にかけて、ゾーン・ディフェンスが隆盛になる。このころのシュートの技能に目を向けると、両手のアンダーハンド・ショットがなされていた。それがやがて両手のプッシュショットへと移行し、1930年代にはフロア上からなされるシュートはすべて両手のプッシュ・ショットになったとされている。

この時期になると、先に得点したチームはそれ以上攻撃を仕掛けることをせず、相手が出てこないところでパスやドリブルなどを繰り返す時間稼ぎ（ストーリング）が多様された。これによりゴール付近だけを防御するゾーンディフェンスが衰退する。しかしやがて制定される10秒ルール（10秒以内にボールをフロントコートに進めなければならない攻撃促進ルール）が再びゾーンディフェンスを隆盛にする。

しかし1948年、スタンフォード大のコーチ、ハंक・ルイスティーによるワン・ハンド・ショットの考案は野投率を向上させるのに大きく貢献したばかりでなく、ゾーン・ディフェンスを効果の少ないものとしてしまったのである。

また、1950年にはマルクエッツ大のコーチ、エド・ヒッキーがダブル・スクリーンを考案、1955年にはアウバーン大、ジョエル・ジャック・ナーゲルによるシャッフル・オフenseがレイアップ・シュートを多用して成功など、集団技能の著しい発達が見られた。

通常、ダブルスクリーンは指定対人防御に対して有利である。さらにレイアップショットはゴール付近で使用するシュートであることから、このころはゴール付近を集中的に守るゾーンディフェンスがあまり使用されていなかったことを示している。

表1 バスケットボールの技能発達史略年表

年代	項 目
1891	・ネイル・スミスによりバスケットボールが考案される。
1900	・両手のアンダーハンドショット隆盛。
1930	・両手のプッシュショット隆盛。 ・ストーリングが多用される。 ・ストーリング防止のため攻撃促進ルール（10秒ルール）制定。
1950	・ハंक・ルイスティーにより、ワンハンドショットが考案される。
1955	・ジョエル・エービスがシャッフルオフenseを考案（レイアップショット多用）。 ・エド・ヒッキーによりダブルスクリーンが考案される。

7. 球技における集団技能発達の原理

先に示した集団技能発達史によると、両手のプッシュ・ショットや片手のワンハンド・ショットは、ガードにゴールの番人をさせていたところの対人防御法や、そのあとに発明されたゾーン・ディフェンスを衰退させるに十分な要素を持っていたと考えられる。その最も大きな要因は、ゴールから離れた位置からの野投率の向上である。特に片手のワンハンド・ショットによる野投率の向上は、それまでのディフェンス優位のゲームを一変させてしまったと考えることができる。次に、ダブル・スクリーンやシャッフル・オフENSEなど、攻撃側の集団技能の発達が何を意味するか考えてみる。

先にも述べたが、通常スクリーン・プレーというのは対人防御に対してなされる。しかも攻撃側1人では振り切れないほどのプレッシャーがディフェンス側から与えられたと考えるのが自然である。つまり、外角からのシュートの脅威が、防御をゴール下の地域から外におびき出したのである。次に発達したシャッフル・オフENSEなどはレイアップ・シュートを多用していたことから³⁹⁾、ゴール下に十分な空間が生じた、つまり防御が外に連れ出されたことを示す有力な根拠となる。

以上のことを整理してみると、集団技能発達の要因になるのは、1つはルールである。サッカーの場合、それはオフサイドのルールであり、バスケットボールの場合は10秒ルールがそれにあたる。そして2つめは、攻守の均衡を崩壊させる技能の発達である。サッカーの場合は特にパスの技能向上がその要因になっていることが示された。同様に考えるとバスケットボールの場合、それは外角からのシュート率の向上が主要因になっている。この点を抜きにしてスクリーン・プレーやシャッフル・オフENSEの発生の必然性はないといってよい。

つまり相手がゴール下の空間を占めていれば、これらのプレーはおろか、体育で頻繁に指導されるパス・アンド・ランといった集団技能までもが有効性を保証されないということである。例えばリングを低く設置してやればランニング・シュートやドリブル・シュートのシュート率は格段に向上するだろう。しかしそれに伴って外角のシュート率も高まることがなければ、ディフェンスは以前よりも増してゴールの近くを守ることになる⁴⁰⁾。図1はアメリカ・プロ・バスケットボール・リーグ（左）と大学生女子（右）の試合のワン・シーンである（●=ボールを持ったオフENSE、■=オフENSE、□=ディフェンス）。プロの場合はディフェンスとオフENSEとの距離がより緊密である。しかし大学生女子の場合、ディフェンスは自分のマークしている相手がボールを保持していない時は、むしろカットインに備えて制限区域内に寄る傾向がある。これはいわばディフェンスのゾーン化ともいえる現象で、いったんこれがおればディフェンスは容易には外に出てこない。プロの場合はゾーン・ディフェンスがルールで禁止されていること、そして主にボールを保持したものとそのディフェンスとの1対1をショーとして楽しめるようにすること、などの配慮からディフェンスは図のような極端な布陣になる。しかしそのことを抜きにしても、成功率の高い外角からのシュートを恐れる場合、アマチュアの試合でも同様の傾向が見られる。

それでは体育の授業でも外角からのシュート率向上をめざしてシュート練習中心のドリルを増やせばよいのだろうか。

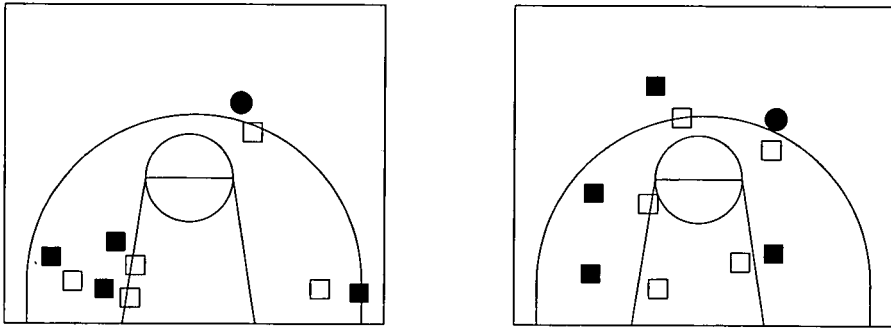


図1 プロとアマチュアのディフェンスの相違

8. 集団技能発展の落とし穴

尾崎によると、シューターを育成するのに必要な期間は2週間とされている⁴¹⁾。しかしそれは熟練者のうちでも手の大きさや手首の柔らかさなど、一定の条件をクリアした者について言われていることで、加えてチームの練習中に200本、個人的に500本のシュート練習をした場合という想定である。そこでJ大学バスケットボール部員に毎回の練習（週4回）で同じ位置から100本のシュートを撃ってその確率を記録したところ、初心者の場合、成功率が55%に達するのにおよそ2ヶ月の期間を要することもわかった⁴²⁾。

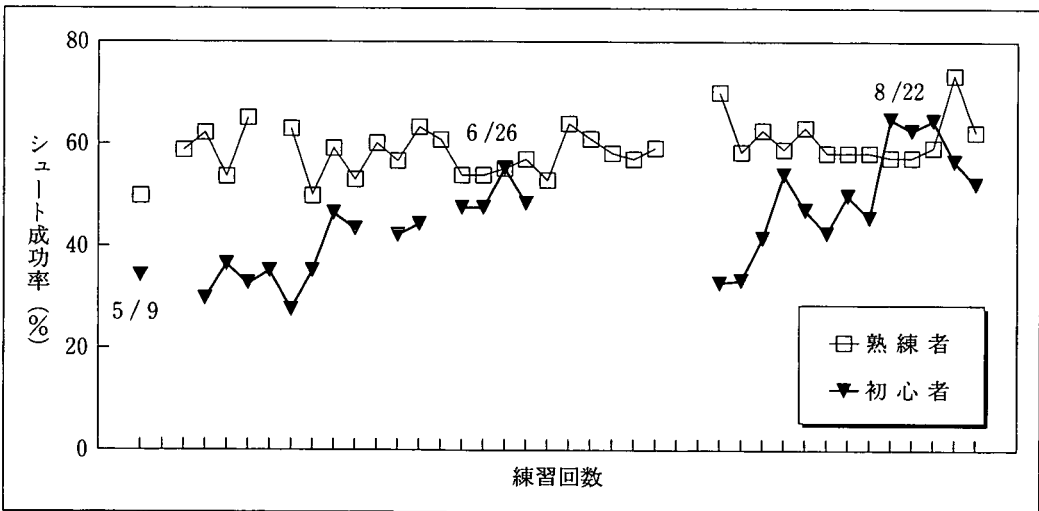


図2 J大学の熟練者と初心者のシュート率推移

これらの結果が意味していることは、限られた单元内でシュート率を向上させるのは不可能に近いということである。

バスケットボールの発達史によれば、当初バスケットボールの戦術は防御を中心に発展したことが知られている（ディフェンス偏向期⁴²⁾）。このことはバスケットボールの創案者ネイ・ス

ミス自身の「初期の頃は、1ゲームのスコアが3点とか4点というのが普通であった、そしてなかには、わずか1点とか零点というゲームさえあった。両チームとも無得点の場合もあった」⁴³⁾という記述にも裏付けされる。今日では1試合の得点が100点をこえることもあることから考えても、当時のゲームはまさにディフェンス偏向型であったことが容易に推測される。そしてこのゲーム様相に変化が生じたのは、外角からのシュート成功率の向上に起因していることはすでに述べた。

したがって外角からのシュート成功をあまり期待できない体育授業では、集団技能はディフェンス偏向期より先には発展しえないということである。

具体的な例をあげると、ディフェンスがゾーン化してゴール下で動かなくなると、オフェンス側はシュートを入れる手だて（ゴール下のシュートやランニングシュート、ドリブルシュート等）を失ってしまうということになる。

ゲーム様相の変化という観点からいうと、学校体育の単位内で行われるバスケットボールのゲームは、ほとんどがディフェンス偏向期より先に発展し得ない、ということが明らかになった。しかし、多くのバスケットボールの攻撃法、特に集団によるものは、ディフェンス偏向期より後に出現していることが、先の技能発達史より読みとれるのである。

9. ま と め

仮に指導書に従って集団技能を指導するならば、という想定で考察してきたが、先に示したように、球技のゲーム様相はルールやプレーヤーの技能と密接に結びついている。

サッカーの場合は3人制オフサイドのルールやパスの技能、バスケットボールの場合、リングの規格（高さ・大きさ）に関するルールとシュート技能がゲーム様相を変化させる原因になっていた。

そしてより詳細に考察すると、バスケットボールの場合、リングの規格変更は諸文献にあったように、単に学習者の意欲を高めるのみならず、外角からのシュートを恐れる防御の形態を根本的に変化させる。そしてそれが攻撃と防御の対応関係を生み出す重要な契機となるのである。

これまではルールの変更と集団技能とが別々の次元で考察されることが多かった。しかし本論においては、球技、特にサッカーやバスケットボールの集団技能発展の原理を、技能発達史より導き出した。その原理から見ると、ルールに則った学校体育施設でバスケットボールを行うと、集団の攻防関係を発現させる前に単元が終了してしまうおそれがあることがわかった。

註

- (1) 大井洋一(1962), 小学校ボール運動におけるルールの考え方作り方. 体育科教育: 10巻5号, pp.57-59.
- (2) 細川磐(1971), バスケットボール. 体育科教育: 19巻7号, pp.61-63.
- (3) 荒木豊(1972), 簡易ルールのつくりかた. 体育科教育: 20巻12号, pp.28-30.

- (4) 守能信次 (1986), 授業におけるルールづくり. 体育の科学: 36巻7号, pp.561-563.
- (5) 堀江邦昭 (1992), ルールを工夫した楽しい体育の授業. 体育科教育: 40巻14号, pp.37-40.
- (6) 小沢久夫 (1959), 女子ルールの問題. 体育の科学: 9巻7号, pp.294-295.
- (7) 三井田フミ (1959), 女子ルールのバスケットボールゲーム. 体育の科学: 9巻7号, pp.296-297.
- (8) 鈴木善雄, 丹下保夫, 松島悟(1963), バスケットボールにおける技術指導の問題点. 体育学研究: 8巻1号, p.127.
- (9) 鈴木善雄, 丹下保夫, 松島悟(1963), バスケットボールにおける技術指導の実験的研究. 体育学研究: 8巻1号, p.279.
- (10) 落合優 (1981), ルールを変えてみよう. 体育科教育: 29巻9号, pp.56-57.
- (11) 平川謙二郎 (1982), 能力差の大きい種目の導入の方法: 体育科教育: 30巻6月増刊号, pp.46-48.
- (12) 西山常夫 (1971), 体育の学習内容としてのルール: 体育科教育, 19巻5号, pp.58-60.
- (13) 大沢利夫 (1972), ミニ・バスケットボールの簡易ルールと指導の仕方. 体育科教育: 20巻12号, pp.40-44.
- (14) 堀江邦昭 (1992), ルールを工夫した楽しい体育の授業. 体育科教育: 40巻14号, pp.37-40.
- (15) 村田寛三(1957), バスケットゴールの高さが人間関係に及ぼす変化について. 体育学研究: 3巻1号, p.34.
- (16) 村田寛三 (1958), バスケットボールのゴールの高さの研究 (第3報). 体育学研究: 4巻1号, p.44.
- (17) 峯村昭三 (1964), バスケットボールのシュート練習法に関する研究 (小内径リングの使用の効果について). 体育学研究: 9巻1号, p.281. 峰村の小内径リングは現在実用化されている。
- (18) 美濃部栄(1968), バスケットボールにおけるゴールの規格についての研究. 体育学研究: 12巻5号, p.201.
- (19) この実践記録は, 1985年上越教育大学付属小学校授業記録および授業 VTR に基づいた。
- (20) 高橋一栄(1986), 体育学習における運動施設に関する研究—特にバスケットボールにおけるリングの高さとリングサイズの違いによる学習効果について—. 体育の科学: 36巻10号,
- (21) 多和健雄編著(1974)サッカーのコーチング. 大修館書店: 東京, pp.26-52. pp.827-832.
- (22) ゲームに勝つという目的を達成するための一連の計画的行動。さらに, 瀧井は, 戦術の実際を通して, 経験的に得られた認識が一般化され, 理論として構築されてきたものであり, 系統的に発達し得るものである, と述べている。
- (23) 10人のフィールドプレーヤーの配置の仕方。
- (24) マクドナルド: サッカー・マガジン編集部編訳 (1982) 写真で見るサッカーの歴史. ベースボール・マガジン社: 東京.
- (25) モリス: 白井尚之訳, 岡野俊一郎監修 (1983) サッカー人間学—マンウォッチング—. 小学館: 東京, pp.68-85.
- (26) 瀧井敏郎 (1990) 戦術の運動学的認識. 金子明友・朝岡正雄編著, 運動学講義. 大修館書店: 東京, pp.76-87.

- (27) 味方チーム、相手チーム双方のプレーヤーが、ボールをその中間の地面に投げられるような姿勢で組み合わせることによって形成される。双方 8 人ずつで形成される場合が多い。
- (28) ボールを持ったプレーヤーの周囲に味方チーム、相手チーム双方 1 名以上のプレーヤーが密集して、ボールの奪い合いとなった状態。
- (29) 地上にあるボールの周囲に味方チーム、相手チーム双方 1 名以上のプレーヤーが密集して、ボールの奪い合いとなった状態。
- (30) 日本サッカー協会 (1996) サッカー競技規則。
- (31) 文部省 (1989) 小学校指導書, 体育編。
- (32) 文部省 (1989) 中学校指導書, 保健体育編。
- (33) 杉山重利・梅本二郎 (1989), 改訂小学校学習指導要領の展開体育科編, 明治図書出版: 東京, pp.207-214.
- (34) 浦井孝夫・山川岩之助 (1989), 改訂 中学校学習指導要領の展開保健体育科編, 明治図書出版: 東京, pp.117-125.
- (35) 前掲, 多和, p.30.
- (36) 吉井四郎(1979), バスケットボールのコーチング・基礎技術編, 大修館書店, 東京, pp.18-36 (2. 競技に関する知識)。
- (37) 三輪守男, 佐々木茂(1960), バスケットボールの発明発展に影響を与えたと思われる諸要因について・第 3 報, 体育学研究: 5 巻 1 号, p.16.
- (38) 古川幸慶(1983), 戦術・技術の発達とルールの対応ーバスケットボールー, 体育の科学: 33巻7号, pp.504-508.
- (39) 前掲, 吉井, p.30.
- (40) これとは逆に遠方からのシュートが入るようになると防御は拡大する。小沢久夫(1960), ショットの位置と種類について, 体育科教育: 8 巻 7 号, p.19.
- (41) 前掲, 吉井, pp.214-215.
- (42) 前掲, 三輪。
- (43) J.ネイスミス著, 水谷豊訳(1980), バスケットボール・その起源と発展, YMCA 出版: 東京, p.105.

Do Narrow and High-placed Goals Obstruct Development of Group Skills ?

Ryosuke TSUCHIDA* and Kiyoshi SAKAKIBARA*

ABSTRACT

The relevance between rules of facilities and development of group skills in basketball games was studied. Modifications of rules were discussed from many aspects in studies of teaching materials, however, the relevance between the provisions (especially, size of the goal) and the development of group skills was not reported.

In the early years of the history of basketball, group skills had tended to develop from constructing defense system. This tendency was changed by innovation of one-hand shot. The shot was useful for a long outside shot and changed the phase of a game.

Then we investigated increase of shooting percentages about a trained player and an untrained player. They made 100 one-hand shots from the same point on the floor (4 days/ week) in their practices. The investigation showed that the shooting percentage reached 55 % after two months from starting the practice. This means that most outside shots which were made by learners in a basketball class will not change the phase of defensive game. Narrow and high-placed goal and its regulation of the rule of facilities needs to be reconsidered for developing group skills.

* Division of Physical Education, Home Economics and Technology:
Department of Health and Physical Education